

児童舞踊研究

－‘童心’とナンセンスの感覚－

畦山恵理子

(お茶の水女子大学)

[1] 研究の目的及び方法

幼少より児童舞踊に接し大人が創り子供が踊る、その関係における難しさを常に感じてきた。そして児童舞踊を理解し、その意義を追求していく上で重要な役割を担うのが‘童心’の概念であると私は考える。本研究では、大正期の『赤い鳥』運動を中心とする童心主義文学から‘童心’を生んだ社会的背景とその解釈を明らかにし、現代の童心芸術におけるナンセンスの感覚¹との関連性や児童舞踊における生活主義²との関連性を探ることを目的とする。実際の振付例としては、大正中期から昭和初期の文献による図解資料182点のうち、時代別の振付の比較に適していると思われるもの9点、及び昭和初期から現在にいたるまでのVTR資料235点のうち6点からその傾向を探り、さらに振付例が正確に残されている「七つの子」の図解資料2点から、生活主義導入前後の振付上の変化について比較分析・考察する。

[2] 結果及び考察

1. ‘童心’の概念を生んだ社会的背景

‘童心’という言葉が広く用いられるようになったのは大正中期から末期で、その性格は鈴木三重吉の主催する童謡雑誌『赤い鳥』に代表される。それは「子供は天使である」「子供には階級がない」³などの言葉で表されるような、‘童心’の世界を絶対的な理想の世界と見たものであった。しかしその余りに絶対的な見方から批判を受け、次のリアリズム（生活主義）²へと移行していくこととなるが、この『赤い鳥』の運動を中心とする時期は童心主義時代と呼ばれ、児童舞踊にも概念的に大きな影響を及ぼしたと考えられる。

2. ‘童心’の解釈

童心主義文学における‘童心’の概念については様々な解釈があるが、大きな意味では「大人と子供を結び付ける曖昧な概念」⁴であったといえるだろう。例えば未明が‘童心’を「自由」「率直」「無邪気」「正直」⁵といった純真で率直な子供の心であると捉えたのに対して、白秋は、子供の持つ心に象徴されるような大人の中の無垢な心、つまり「未知の精神的境地」³と捉えていた。さらに雨情は、‘童心’を子供による芸術と大人による演出の一つのものとして完成させる手段、つまり子供が大人になり大人が子供になるための新しい時限のものであると捉えていた。

3. ‘童心’と表現

現代の童心芸術において、今江氏は‘童心’の

特徴的表現の一つとして、ナンセンスの感覚¹という言葉を使用し、『赤い鳥』に掲載された子供の詩をナンセンス詩という言葉で説明している。このナンセンスの感覚は、子供特有の突発的な発想であり、舞踊に限らず子供による作文やお絵描きなどにも同様に見られる表現である。私はナンセンスの感覚を‘童心’の特徴的表現の一つとする立場に立って、そのナンセンスの感覚が舞踊においてどのような形で現れるのかを振付の中に見ようと試みた。そして、大正期より現在にいたるまでの作品のうち、特に資料数の多い作品「七つの子」をもとに比較したところ、童心主義時代を境にいくつかの変化が見られた。例えば「七つの子」では「からす」「なく」など個々の単語に対するあて振りが、「からすなぜなくの」という文節単位の「意志・感情による振り」⁶へと変化している。それは「からす」「なく」といった形の模倣ではなく、「からすはなぜなくのだろう」という意志を尊重しようとする生活主義導入の効果であると考えられる。

[3] 結論

‘童心’の概念は大正期の童心主義文学から生まれ、子供と芸術という二つの関係を結ぶ重要な概念となっていった。そして‘童心’の表現のひとつとしてナンセンスの感覚と呼ばれるものがあり、それは子供による芸術全般に見られる子供独特の発想であることが浮き彫りになった。また同時期に児童舞踊の振付にあて振りから「意志・感情による振り」⁶への変化が見られたことから生活主義の導入の効果がうかがえた。また、現実には生活主義の実践に伴って減少したあて振りが、現在わずかながらも使用されつづけているという事実も無視できない。しかし童心主義時代の振付の変化からは、確かに子供の意志や感情中心に振付をするといった生活主義導入の効果が見られ、そうすることで初めて‘童心’はナンセンスの感覚のような子供独特の特異な表現として現れるのである。

1. ナンセンスの感覚－児童文学研究家の今江が童心の特徴的表現の一つとして使用した言葉で、センス（彼は分別という意味で使用している）のある大人からは決して生まれることのない突発的な表現を指す
2. 生活主義－文学界においては、児童の生活に根ざした文学を創作しようとする現実的な手法をさすが、児童舞踊においては児童舞踊研究家の印牧の主張する子供の生活に即した振付に値する手法であると考えられる。
3. 鳥越、吉田他『日本児童文学作家1』 P.64
4. 鳥越、吉田他『日本児童文学の展開』 P.144
5. 小川『未明感想小品集』 P.147
6. 印牧『学校舞踊創作の理論と実際』 P.89